

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

平成 31 年 1 月 20 日	
所属部局・職	野生動物研究センター・修士課程学生
氏名	前田 玉青

1. 派遣国・場所 (〇〇国、〇〇地域)
霊長類研究所、愛知県
2. 研究課題名 (〇〇の調査、および〇〇での実験)
ゲノム実習
3. 派遣期間 (本邦出発から帰国まで)
2018/11/12-2018/11/16
4. 主な受入機関及び受入研究者 (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)
京都大学野生動物研究センター: 岸田拓士教授 京都大学霊長類研究所: 早川卓志准教授、Yan Xiaochien さん
5. 所期の目的の遂行状況及び成果 (研究内容、調査等実施の状況とその成果: 長さ自由)
写真(必ず1枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの)の説明は、個々の写真の直下に入れること。 別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。
<p>ゲノム実習では、ホルモン班と DNA 班ふたつのグループに別れましたが、私は DNA 班でした。屋久島実習で採集したヤクシカとヤクザルの糞サンプルからミトコンドリア DNA を抽出し、その中のいくつかのマーカー配列を調べました。去年は半分くらいしか成功しなかったと聞いていましたが、今回はほとんどのサンプルでうまく配列が読み取れました。新鮮なフンのみを採取することにしたのが奏功したのかもしれない。</p> <p>私は主にサルの DNA 解析をしていましたが、サルでは、今回と前回3回分、すなわち 2017 年春から 2018 年秋のデータを使って、島内でのハプロタイプ分布を調べ、さらにそれを 16 年前に行われた Hayaishi and Kawamoto(2006)に研究における結果と比較しました。すると、ニホンザルの寿命 20-30 年に比べて短いタイムスパンであるにも関わらず、ひとつのハプロタイプの分布が変わっていることがわかりました。さらに興味深いことに、WRC の杉浦さんによって観測された群れの行動圏の移動と、ハプロタイプ分布の移動は逆方向に起きていることがわかりました。個体レベルの移動が起こっている説、実は両方向に分散が起こっているが、それぞれその一方しか観測できていない説等ありましたが、何れにせよ真偽を確かめるには今後もデータ収集を続けていくことはもちろん、観察下の個体の遺伝情報を得た上で観察を続けていくことが必要なのではないかと思います。</p> <p>シカはサンプル数が少なかったため、島内での比較はやめ、島外の個体群(九州・五島・慶良間諸島・対馬)と比較しました。</p> <p>多くの解析は私にとってはじめてでしたが、何人かの生徒が解析を使ったことがあったため、教えてもらいながら作業をすることができました。海外からの招聘者と一緒に受講したため、それぞれのバックグラウンドも豊富で、得意な分野も異なり、いろいろな意見を出し合いながらポスターを制作できたのは非常に良い経験になったと思います。また、屋久島でお世話になった講師の方々も、メールでたくさんのアドバイスをくださり、おかげさまで短い実習でしたが面白い研究ができたなと思います。</p>

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

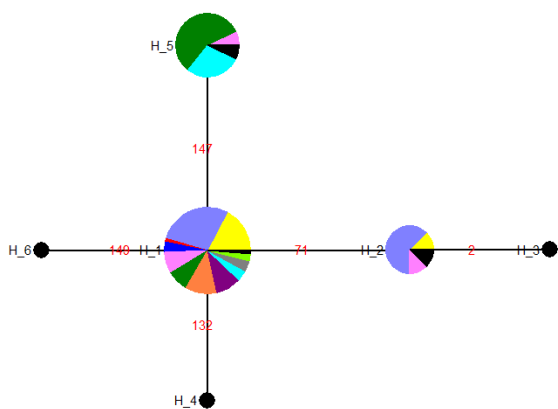


Fig 2. ヤクザルのハプロタイプネットワーク

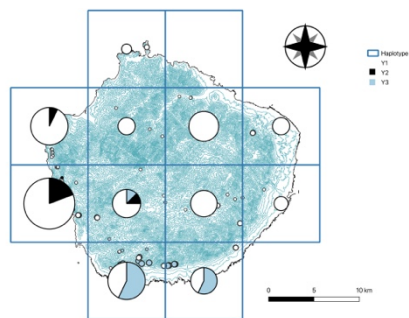


Fig 1 サルのハプロタイプ分布図

6. その他(特記事項など)

謝辞: 早川先生・岸田先生・Yan さんには実習で大変お世話になりました。ありがとうございました。また、このような機会を与えてくださった PWS に感謝いたします。